

## ある名誉教授が見た筑波大学

原 康夫

筑波大学名誉教授

私は9年前に定年退職した名誉教授で、専門は物理学です。名誉教授の氏名は職員録に掲載されており、筑波大学の準構成員として位置づけられ、筑波大学の発展を念願しているので、私の眼は客観的な「学外の眼」とは言えないかもしれません。

定年退職後は、私立大学で7年間教育に従事し、最近では高校からの希望に応じて物理の出勤講義を行い、多くの時間を大学と高校の物理の教科書の執筆にあてています。また、出身高校の運営連絡協議会に同窓会代表として参加しています。これらの仕事での経験を通じて、「学外の眼」で見た筑波大学について思うことを執筆します。見当違いの意見もあるかと思いますが、ご参考になれば幸いです。

### 組織の改編は結果につながるか

私が卒業した都立大学附属高校は、1950年代には、いわゆる名門校でしたが、学校

間格差をなくすという理由で導入された学校群制度などのために、国立大学への進学者の少ない高校になりました。格差をなくそうとした施策が新しい格差を生み、経済的に恵まれない生徒の国立大学への道を狭くしたことは反省すべきだと思います。

そこで、東京都は中高一貫制の中等教育学校を開設することになり、前身が旧制の7年制中高一貫校であった私の母校は今年から6年制の中等教育学校に移行します。その途端に、人気が飛躍的に高まり、受験生が押しかけました。

ところで、前身校が同じ都立大学の方は、首都大学東京に改編した途端に受験生が激減したのは皮肉な事実です。改革の方向は評価できるのに、受験生が減ったのは、高校生への情報発信、つまり、マーケティングが不十分だったからではないでしょうか。

筑波大学での組織改編が良い結果を得られるよう希望しています。

## セールスポイントの発信が重要

高校で出前授業をするとき、高校生がどのようにして自分の進路を探り、志望校と専攻を決めるのかが気になります。高校生にとって答を見つけるのは難しい作業だと思います。大学の実態が外部に不透明であれば、高校生はとまどい、偏差値とブランド名で判断しがちになります。

筑波大学が特色と魅力を発信し、高校生が筑波大学を選択肢の一つとして考慮し、学生生活を送る最善の大学として納得して受験し、筑波で学べる幸せにあふれて入学する環境作りをしてほしいと思います。

この原稿を書いている3月中旬には主要大学高校別合格者数という記事が掲載されている週刊誌を見かけます。開いてみると、主要大学の中に筑波大学が出ていないものがあります。これでは合格者は落胆するでしょう。私も納得できません。大学評価基準には色々あるので、もっと積極的にPRして是正を図るべきだと考えます。

進学する大学の選択を書店で本を買う場合と比較するのは乱暴だとは思いますが、あえて比較してみます。本を買うことは、本の存在を知ることから始まります。筑波大学が高校生や父母の目に留まるために、筑波大学と関係者がマスコミに良い意味でひんぱんに登場するのは望ましいことです。今日も、林先生の「笑えば血糖値が下る」

という発見を取り上げたテレビ番組を楽しく見たところです。

本を手にして、まず見るのはタイトルと著者名、それに帯ですが、これらに対応するのは、筑波大学の特色、理念、魅力を簡潔に集約したセールスポイントの発信でしょう。1993年に米国大学のアドミッション・オフィス視察した際に、大学紹介パンフレットに見かけたセールスポイントの例に、Diversity of Opportunity、Diversity through Excellence、Great Professors、優れたコア・カリキュラム、科目選択の自由、美しいキャンパス、多彩な学生生活と宿舍生活、Financial aids、所在地の文化的魅力、・・・などがありました。

そのころ学長に就任された江崎玲於奈さんが受験説明会のポスターで高校生に Acquire wisdom at our beautiful campus. 「つくばの美しいキャンパスで英知を手に入れよ」と発信したことを思い出します。

最近の国立大学のホームページで感心したのは、大阪大学の「目指せ。使える地球人」、「地域に生き世界に伸びる」です。

## 創立初期はオンリー・ワン

大学改革の先導的役割を果たすよう筑波研究学園都市に開設された筑波大学は、「開かれた大学」、「教育と研究の新しい仕組み」、「新しい大学自治」を指導原理とし、多

くの総合科目を開設し、所属教育組織に限られず幅広く学べること、必修科目としての情報処理を先駆けて取り入れたこと、充実して便利な図書館、広くて美しいキャンパスと宿舎での学生生活、外国人留学生にとっても学びやすい大学である、などの理由で、学生が「時代に即した新しい勉強ができる」、「新しいテーマの授業が受けられる」、「自分の好きな勉強ができる」、「カリキュラムの選択が自由である」、「教授が授業の取り組みに熱心である」などの点を評価し、満足して卒業し、国立大学の中では別格のオンリー・ワンの大学と位置づけられていたと思います。

## 現在は？

しかし、国立大学の国立大学法人化などの流れの中で、他の国立大学が筑波大学の「新構想」を取り入れ、「筑波大学化」が進みました。大学改革を先導的に試行した筑波大学にとって満足すべき事実です。

しかし、他大学の改革の進行に伴って、筑波大学のセールスポイントが目立たなくなりました。筑波大学のホームページを見ると、改革の意欲は感じられても、改革によって筑波大学にどのような新しいセールスポイントが生まれたのかが「学外の眼」には明らかではありません。

現在の筑波大学には、日本のトップレベ

ルの分野がいくつもあり、世界のトップレベルの分野もありますが、スポーツ以外は外部から見えにくく感じます。

それに加え、筑波大学の教員の研究成果のニュースをみて戸惑いを感じるのは、所属の表記での「人間総合」などの研究科名です。「学外の眼」に専攻が分かりやすい「心理学」、「体育科学」、「基礎医学」などの学系名あるいは専攻名を使用すべきではないでしょうか。研究成果への信頼度も高まると思います。

## 筑波大学の教育に望む

大学の基本は、社会の各界で活躍しうる人材の育成です。そのためには、生涯にわたって学び続ける能力の育成、問題の発見と解決に必要な論理的思考能力とコミュニケーション能力の育成が重要です。

### 1. 教室外学習の重視

教育改革を行うのなら、国際的には当たり前なのに、日本では行われていないことから始めることを強くお勧めします。

残念ながら、日本の大多数の大学生は教室外学習を週1時間程度以下しか行っていないようです。この事実は多くの大学での教育改善の試みの中で広く認識されるようになりました。

新しい学問的なものの見方、考え方を学ぶ大学教育は教室で学ぶだけでは不十分だ

と規定しているのが、大学設置基準です。

これからの筑波大学の教育が大学設置基準の規定通りの教室外学習を前提にしたものになることを強く希望します。そのために、開設科目の授業回数を週複数回とし、学生が各学期に選択する科目数を大幅に減らすことから始めたらどうでしょうか。

## 2. 教員の役割分担が必要

米国の多くの大学では、教育は公費によって行い、研究は外部資金によって行い、研究者養成のための大学院では外部資金を獲得している教員が研究指導を担当するという仕組みだそうです。日本の国立大学でも、長期的に見れば、こうなると思います。

教科書の執筆者としての経験によれば、残念ながら、大学生と高校生の学力と知識に明確な差はなくなりつつあります。高校教育と大学院教育が掛け持ちではできないように、大学初年級教育と大学院教育の掛け持ちも難しくなってきました。そこで、大学初年級の基礎教育を高校教員や予備校にアウトソーシングする大学が増えていますが、これは教育的に見て問題です。基礎教育は学識豊かな教員が協力して実施すべきものです。したがって、教育と研究に関する大学教員の役割分担が不可欠です。

## 3. プログラミング言語教育

現在の学生の弱点である論理的思考能力の強化に役立ち、しかも実用的効果がある

ものとして、C言語、JAVAなどのプログラミング言語の習得が挙げられます。専門によってはVisual Basicのようなソフトが良いと思います。外国語の代わりに言語科目として認定することも考えられます。

## 4. 「問題な日本語」教育

北原保雄さんが編集した超ベストセラー「問題な日本語」を参考にして、新しい必修の日本語教育の演習科目を開発すれば、筑波大学の超目玉科目になると思います。

## 5. 幅広い進路の想定

各専攻での教育は狭義の研究者養成ばかりでなく、卒業後の幅の広い進路を前提にしたものにしてほしい。副専攻制も検討に値すると思います。

## 6. 中等教育学校の教員への道を広げる

高校を訪問して感じることは、優秀な高校教員の育成の必要性です。これまで筑波大学から優秀な高校教員が誕生しています。しかし、これからの日本の中等教育における中高一貫の中等教育学校の役割の重要性を考えると、教育実習によって各専攻の正規の教育課程の履修が妨げられることなく、中学と高校の両方の教員免許が筑波で取得できる教職課程の開設が不可欠だと考えます。実現には問題があり、改革への強い抵抗が想像されますが、日本の将来のためにも、ぜひ実現してほしい。

(はら やすお/理論物理学)